

---

## 自宅での看取りを希望した透析患者と家族へのかかわり

---

医療法人衆和会 長崎腎病院

○北嶋佳代 田島有佳 高橋沙織 丸田麻莉絵 船越 哲

### 【背景】

当院では透析患者の ACP について積極的に介入しており、透析困難症の病態となった場合に最期の時間をどう過ごすのかを患者・家族と話し合う機会を持っている。今回、自宅での看取りが出来た事例を経験したため報告する。

### 【症例 1】

89 歳、女性、認知症・せん妄あり、透析歴 4 年。家族は長女夫婦と孫の 4 人暮らしであったが、透析導入 2 年後より特別養護老人ホームに入居となった。

ブラッドアクセス(BA)不良で拡張術を繰り返し、長期カテーテルを留置したが認知症のため自己抜去した。以後透析カテーテルを入れ替えていたが、カテーテル挿入困難となり維持透析が不可となり、家族の希望で在宅での看取りとなった。

### 【症例 2】

62 歳、男性、認知症なし、透析歴 14 年。家族は母親と同居、兄弟は近傍に住んでいる。

労作性狭心症あり冠動脈再狭窄あるも、PCI希望していない。患者の帰宅願望が強く、姉弟の協力が得られ在宅での看取りとなった。

### 【考察】

患者を看取るなかで家族への心理的負担を軽減するためには、十分な説明と在宅医を初め在宅での看取りを支えるスタッフの協力体制の確立が必要と考える。